代々木病院の理念
ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

発行　医療法人財団 東京勤労者医療会　1部60円
〒151―0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷１―30―７
ＴＥＬ03(3404)7661
E-mail address　yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

ビキニ事件から60年
「悔しさ」胸に語り続ける

第５福龍丸元乗組員
大石又七さん（80歳）に聞く

「被ばく」が原因と知らず仲間が亡くなっていく

1954年3月1日米国がビキニ環礁で行った水爆実験により、爆心地から160kmの地点で、第五福龍丸が被ばく。「ビキニ事件」と言われたこの事件は日本現代史上、広島、長崎に続く第3の核による被ばくです。2010年7月には、ビキニ環礁はユネスコの負の世界遺産に登録されました。事件から60年が経ち乗組員23人中14人が亡くなっています。当時20才だった大石又七さんにお話をうかがいました。

「ビキニ事件」を語り続ける大石又七さんと第五福龍丸の大漁旗（レプリカ）

大量の「死の灰」あびる

第五福龍丸は1954年3月1日、水爆実験に遭遇しました。はえ縄を海に入れた夜明け頃、オレンジ色の光が海全体を包み、その後海底から「ドドドドーツ」という音が…。そして1時間から2時間位して、空から「死の灰」と呼ばれる白い粉が降ってきました。これは爆発でサンゴ礁が粉々に砕かれて吹き上げられた物で、その後降って来たものには強い放射能が含まれ、甲板に足跡がつくくらい積もりました。乗組員たちは吐き気や食欲不振、「死の灰」が当たった体の部分は火傷の後のようになり、触ると髪の毛が抜け落ちました。

政治結着させられる

乗組員たちは220ミリシーベルト相当の内部被ばくをしたと考えられています。無線長の久保山愛吉さんは「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」という言葉を残し、半年後に亡くなりました。

日本に持ち帰ったマグロは「原爆マグロ」として水産業界に大きな損害を与え、事件が公になるにつれ、世界的に原水爆反対運動が起こりました。しかし当時は米ソ冷戦時代。核兵器開発にしのぎを削っていたアメリカはこの運動を良しとせず、原発導入を推進しようとしていた日米政府は事件発覚後9ヶ月という早さで、政治結着させました。これにより乗組員たちは被ばく者で無くなったため、「被爆者手帳」も持っていません。盛り上がった反対運動は潮が引くように収まり事件は忘れられていきました。

「私たちが被ばくしたのは戦争が終わってわずか9年後。敗戦国・日本と米国の関係は歴然としていたし、当時の多くの医者や科学者も放射能の知識はなく隠すことは簡単だったのでしょう。」大石さんはふり返ります。

悔しい思いが沈黙破る

大石さんは言います。「被ばく者としての偏見、見舞金をもらったことへの嫉み、水産業者の冷たい目、そんなものから逃げたかったから、事件が忘れられていくことは嫌ではなかった。でも仲間たちが自らの死について被ばくが原因だとも知らずに、40、50歳台の働き盛りで亡くなるのを見て、自分が声をあげなくちゃいけないと思ったんです。当時はまだ『内部被ばく』なんて言葉すらなかった。でも長い時間の中で、加害者の米国から機密文書の公開という形で、色々なことが明らかになり、大切なことが隠されていたことも知った。このまま何も言わなかったら事件は無かったことになっちゃう。そんなの悔しいじゃないですか」

大石さんは、現在80歳。肝臓癌、糖尿病、高血圧、慢性気管支喘息、心房細動、2年前には脳出血を発症し、右半身に麻痺があります。力強く語っていますが、残された時間はそう長くはないように思われます。

ビキニ事件とは

この事件をきっかけに原水爆禁止運動が始まる

第二次世界大戦後、米ソは冷戦時代に突入し、核兵器開発競争をしていました。1954年3月1日、ビキニ環礁（日本の南東4500キロメートルの太平洋上）で核実験をしていた米国は、広島原爆の1000倍も威力もある水爆「ブラボー」を爆発させました。操業中のマグロ漁船・第五福龍丸と乗組員23人は吹き上げられた、「死の灰」を浴び、その日のうちから乗組員に吐き気、下痢、頭痛などが出はじめました。そして米軍に証拠隠滅のために沈められないように、「SOS」を発信せず空や海を警戒しつつ2週間かけて母港・焼津（静岡県）へ戻っていきました。

また、この事件では後に第五福龍丸以外にもおよそ1000隻の漁船が放射能汚染魚を獲っていたことが明らかになりました。

日本に戻った第五福龍丸の積んできたマグロからは放射能が検出され、日本中は大騒ぎとなり焼津や東京などで汚染されたマグロが大量に廃棄されました。さらに5月には雨から放射能が検出され、9月23日には無線長・久保山愛吉さんが亡くなり、杉並区をはじめ全国各地で核兵器禁止の署名運動が行われました。1955年8月には広島で第1回「原水爆禁止世界大会」が開催され、署名は3200万筆（有権者の過半数）に達しました。

核兵器禁止の運動が広まるなかで米国は、日本政府と交渉し、200万ドル（約7億2千万円）を「見舞金」として日本政府に払うことで幕引きを図りました。これによりビキニ事件は「決着」がついたかのような印象が与えられました。

時期を同じくして原発導入を計画していた日本の政財界は、「原子力平和利用」キャンペーンを進め、米国はこれを後押しし、1955年日米原子力協定が結ばれます。ビキニ事件を契機に日本への原発導入が進められたのです。

千駄の萱

いま話題の「永遠の0（ゼロ）」を妻と2人で見ました。映画は、国に命を捧げることが当然であった戦前、家族のために「生きること」を優先しながらも、最後に「特攻」を選ばざるを得なかった主人公の苦悩を岡田准一が好演しており、ドラマとしては評価できるものでした▼しかし、戦争や特攻が何故起きたのかなどの視点を欠いていたことや、原作者の百田尚樹氏が憲法改正論者であることを知るにつれ、戦争を美化する危険な映画ではないかと思えるようになりました。あの戦争は、明治から続く富国強兵策と中・露との戦争での勝利による自惚れの帰結であり、自惚れを増幅するために、国家による教育・情報統制等が悪用されました▼いま私達の周りでは、アベノミクスと並行して「戦後レジームからの脱却」のため、特定秘密保護法施行、教育改革、そして憲法改正の動きが強引に進められています。あたかも戦前の日本に回帰するように感じるのは、私だけではないと思います。今こそ、誰も戦争の加害者や被害者にならないよう、目を覚まし、声を上げる時ではないでしょうか。（ま）